

そばに置きたい



職人の個性光る ガラス小鉢

小谷栄次さんのガラスの小鉢。透明、水色、青色の3色がある。高さ6センチ、幅10センチ。1個3千円（税抜き）。問い合わせは福岡県朝倉市の工芸店「秋月」（電話0946・25・1270、火曜定休）へ。

外山亮一撮影



シンプルで何を入れても映えるガラスの小鉢。いまの時期はブドウやナシを入れてもいいかもしれません。表面に斜めに入ったしま模様によって、光が当たると波紋のような美しい影ができます。

つくったのは、「倉敷ガラス」の創設者小谷真三さんの長男、栄次さん（54）です。真三さんは複数の職人が分担するガラスづくりの全工程をひとりですることを始めた先駆的存在です。栄次さんは大学卒業後、その真三さんに弟子入りし、溶けたガラスに空中で息を吹き込む「宙吹きガラス」を習い始めました。

最初の6〜7年間は、吹かせてもらったのはこの小鉢のみ。できた小鉢を真三さんが

チェックし、選ばれたものだけが製品になるという厳しい修業でした。「とにかく形をそろえることだけを考えて吹き続けた」と栄次さん。その後、ようやくぐい飲みとコップもつくってもよいと許可が出て、10年経って初めて自分の作品をつくることになったそうです。

栄次さんのガラスは端正でまっすぐ。真三さんのガラスとはまた違った味わいがあります。厳しい修業のうえに生まれた個性です。「あの時があったから、一つずつ違う作品をつくるときも基本を曲げずにできる」。小鉢は栄次さんの作品づくりの原点です。

（もやい工藝スタッフ

堀沢三香）